

金正恩時代の北朝鮮に対する中国の戦略

東洋学園大学教授 朱建榮

昨年 12 月 17 日の金正日・朝鮮労働党総書記の死去（以下は便宜上、「X デー」と称する）は、「中東の春」、カダフィーの最期、欧州の金融危機などを経験した世界的な激動の中では小さい波紋だったかもしれない。だが、北東アジア地域にとって、行方は読めないが確実に重要な転換点であったことはだれもが認めるであろう。

「X デー」直後から、冷戦時代には北朝鮮の対立側にあった韓国、米国、日本などは緊急に軍事的な警備や監視体制を強化し、その「暴発」「挑発」「混乱」に備えた。一方の中国は、北朝鮮の内政問題をめぐっては韓日米と連携しない姿勢を明らかにし、その姿勢は「やはり同じ独裁体制」「北朝鮮の核開発を黙認」などとも批判された。そのような外部の批判を承知しながらも、中国は公に弁解もせず、独自の北朝鮮外交を続けているが、本文は「X デー」以後の中国の北朝鮮外交の真意と狙いに対する分析を試み、その行動に関する合理的な説明を見出してみたいと考える。

「X デー」後、中国は北朝鮮新体制への支持と支援を表明

金正日の死去は 12 月 19 日正午に正式に発表されたが、北京指導部は少なくともその前日には状況を把握しており、「X デー」当日、劉洪才・駐北朝鮮中国大使ルートを通じて情報を入手したともいわれる。そのため、正式発表の 4 時間後に、中国共産党中央委員会、全国人民代表大会、国務院、党中央軍事委員会の 4 権力機関の名義で速かに弔電を送り、金総書記を「朝鮮労働党と朝鮮民主主義人民共和国の偉大な指導者」と讃え、「中国人民の親密な友人」と述べて、深い哀悼の意を表した。弔電の中で、「朝鮮人民は朝鮮労働党のもとに団結し、金正恩同志の指導下で社会主義強盛国家を建設し、朝鮮半島の恒久平和の実現に向け引き続き前進するものと信じる」として金正恩の指導に言及する表現も入った。一説では、電報の表現をめぐって両国の実務担当者が事前に意見交換する過程で当初は、相手の指導体制に関して「朝鮮労働党中央委員会」との表現に止まっていたが、相手側からの強い要請を受け、「金正恩同志の指導の下に」という表現が加えられたそうだ。また、19 日から中国人民解放軍が中朝国境地帯へ軍隊を緊急に増派した。それらの動きはいずれも、正式発表より前に一定の事前準備、検討の時間を要したものと考えられる。

続いて 20 日午前 10 時頃、胡錦濤主席は呉邦国（全人代常務委員長）、李長春（党の広報と対外連絡担当）、習近平国家副主席（4 人のいずれも政治局常務委員）の同行で北京の北朝鮮大使館を訪れ、金正日の逝去に弔意を伝えた（これとは別に温家宝首相も弔問）。胡主席が北朝鮮の臨時代理大使に対して以下の言葉を述べたと発表されている。

「中国の党、政府、人民は金正日同志が不幸にも逝去されたことに深い悲痛を覚え

ている。金正日同志は朝鮮の党と国家の偉大な指導者であり、中国人民の親密な友人である。朝鮮の革命と建設の事業に生涯の力を捧げ、中朝の伝統的友好協力関係の発展に重要な貢献を果たされた。中国人民は永遠に金正日同志を偲ぶ。朝鮮人民は必ずや金正日同志の遺志を受け継ぎ、朝鮮労働党の周りに緊密に団結し、金正恩同志の指導の下で、悲痛を力に変え、社会主義強盛国家の建設と朝鮮半島の長期的平和のためにたゆまず努力すると信じている」

「中国の党と政府にとって、中朝の伝統的友好協力関係の強化・発展は確固不動たる方針だ。朝鮮の同志と手を携えて努力し、中朝の伝統的友好協力関係をしっかりと打ち固め、建設し、発展させていきたい」¹

また、人民日報系の国際問題専門紙『環球時報』は20日付で「中国は北朝鮮の平穏な権力移行の後ろ盾」と題する社説を掲載し、その中に「北朝鮮が受ける風雨を中国が防ぐ」との表現があった。

20日の中国外交部の定例記者会見では興味深いやり取りがあった。「中国は金正恩氏の訪中を歓迎するか」との質問を受けた劉為民報道官は当初、「ノーコメント」と答えたが、しばらくして「補足したい。中国と北朝鮮は一貫してハイレベル相互訪問を続けている。われわれは北朝鮮の新しい指導者が、双方の都合の良い時期に訪中することを歓迎する」と追加して発言した。この発言は外交部の公式サイトには掲載されなかったが、最高指導者に就任した金正恩の訪中を要請した最初の公式メッセージだったと見て間違いないだろう。

そして金正恩が朝鮮人民軍最高司令官に就任したことが発表されると、胡錦濤は年末の12月31日、「中華人民共和国中央軍事委員会主席」の肩書で祝電を送り、「中朝両国の人民および軍の間には厚い伝統的な友情がある。中朝の伝統的な友好協力関係は新たな歴史的条件下で、必ずや絶えず打ち固められ、強化されるものと信じている」と表明した。

半年後は要注意

中国指導部がいち早く、ピョンヤンの新指導体制への支持を公にしたのは、伝統的な友好関係があるので、率先してその親密ぶりを見せる必要があり（逆にロシアなどより支持の表明が遅れていたら別の憶測が出ていただろう）、最大の支援国である中国からの金正恩支持表明で北朝鮮内部の権力移行を側面支援する狙いもあったと考えられるが、北朝鮮社会での混乱発生に対する深い懸念の裏返しともいえよう。中国軍の国境地帯への緊急配備は、北朝鮮への出動のためではなく、万が一に難民が押し寄せてくることへの備えとの意味も強いと思われる²。

¹ 中国の人民日報社が運営するウェブサイト「人民網日本語版」2011年12月21日。

² 香港『明報』紙の2011年12月25日付社説は、「数十万人の難民が国境を越えて押し寄せてくることは中国にとって最大の悪夢で、北朝鮮で政権の崩壊や内戦の勃発といった

北朝鮮内部の「Xデー」の権力移譲は大方の予想よりスムーズに安定的に行われている。その原因について上海国際問題研究院の研究者は筆者に対して、金正日が死去する前の数ヵ月間、もしくはその直前に、「Xデー」に備えるシナリオが最高指導部内で準備されたか、金正日自身から指示されたかの可能性が高いと指摘した。それゆえ、緊急事態が起こると、ただちに金正恩を党と軍の指導者に推挙する儀式がシナリオ通りに進められ、「権力の空白」を作らなかつたと考えられる。

中国側の研究者の多くは、毛沢東死去直後と金正日「Xデー」以後のことを対比して見ていたようだ。毛沢東死去後の1ヵ月未満で、江青ら「四人組」が事実上のクーデターで追放されたが、北朝鮮の「Xデー」以後、1ヵ月以内が「要注意」との分析があった。しかし筆者は、この両者の間にはかなりの違いがあると見る。毛沢東は建国世代の指導者で、その死去は金日成の死去に相当するショックを社会全体に与えたが、北朝鮮では1994年にそれを経験済みで、2年前の金正日の心臓発作をめぐる対応は「予備警報」と「防災訓練」の役割も兼ねたので、今回は少なくとも一定の心理的な準備ができた。また、毛沢東が指名した華国鋒は当時の中国指導部内のどちらの勢力からも過渡的な人物と目され、実権派、左派、華国鋒派という三大勢力の間にも緊迫した対立が続いていたが、金正恩は血縁関係から一定の正当性があり、またそれにとって代わる勢力は当面存在しない、という違いがある。したがって、「Xデー」1ヵ月後に政変が起こる必然性は小さかったというべきだ³。

では今後も、ほぼ何も起こらずに金正恩体制が安定していくか。筆者は「半年後が要注意」との説を中国の研究者たちにぶつけてみた。

「Xデー」直後、ピョンヤン指導部内では金正恩と各重要勢力とも互いに自分の存在が脅かされるとは思わないし、逆に、政治的指導力が未知数の金正恩を擁し、山積する内政外交上の難題に対処し、この政権の存続を守ることに各勢力とも意識を共有している。したがって、たとえ普段互いに対立や意見相違があっても、今はそれどころではない、内輪もめをすれば共倒れするとの危機感を共に持っており、まずは「君臣一心」で、金正恩はみんなの意見に従って「英明なリーダー」という役を演じ、各勢力は金正恩体制の安定を期して協調するとの均衡はしばらく続くと見られる。

問題はこのような微妙な均衡はいつまで続くか、だ。トップの神格化が進んで数ヵ月後に危機が到来するのではと推測される。金正恩本人はその時点で、自分は本当に何で

事態が起これば、中国も巻き添えになるのが必至。胡錦濤が金正日の死去直後に金正恩の後継者就任を直ちに表明したのは、客観的に見て、北朝鮮の情勢がコントロールを失うことを恐れる中国自身の安全のための布石でもあった」と解説している。

³ この認識に近い中国の解放軍系研究者の分析もネットに紹介された。総参謀部の元大佐岳剛は、「北朝鮮内部で当面、政局の急変が発生する可能性は小さい。金正恩の対抗馬はないし、金ファミリーに属さない高官たちは自身の利益を守るためにも彼を擁護するだろう」と述べた。「金正日の急死で中国は朝鮮が『中国モデル』を取るように誘導すべき」、ウェブサイト「多維新聞網」2011年12月20日。

もできるリーダーだと思い始め、他人の指図を嫌い、自ら指示と命令を出したがるようになる。それに対して部下たちは互いの協調が不可能性になり、我先にと、自分こそ最も忠誠心があり、難題を解く鍵を持っていると金正恩の前で競うようになる。金正恩はそのような「競演」をバランスよくコントロールできず、一部の勢力に傾斜したり、新しい人事体制を急いだりするような事態になれば。それこそ各勢力の間で軋轢が生じ、権力闘争が本格化するだろう。このような転換点は「Xデー」の半年後に訪れる可能性が高く、そこで最大の試練が待ち受けるのであろう。

筆者のこの仮説は中国の複数の研究者から賛同を得たが、中国指導部も、「1カ月危機説」後は「半年危機説」に神経をとがらすのではないかと推測される。このような危機感を抱いているがゆえに、北朝鮮政権内の深刻な権力闘争が勃発する前に、全面支援を示すとともに、金正恩本人に早く接触し、中国式の改革・開放路線へのソフトランディングを勧めたいと考え、その早期訪中の要請を発したのだろうと考えられる。

中国はなぜ韓米日と距離を置くか

中国指導部内にこのような危機感が存在することは、「Xデー」以後、韓米日と距離を置き、独自の北朝鮮対策を展開したことを説明するのに役立つ。なぜなら、金正恩新体制への接近に緊迫感をもつ中国は、北朝鮮側、特に若くて単純な金正恩に、「北京は自分の敵（韓米日）と馴れ馴れしくやっており、自分に都合の悪い事までこれらの国にしゃべっている」と思われたくないからだ。中国は信頼できないと感じれば、金正恩は中国に大事な相談を真剣に持ってこない。金正恩が最高指導者の地位についた直後、というタイミングでは特にこのような感情的な対立、わだかまりの形成を回避したいと中国の指導者たちは読んでいるのではないだろうか。一方、中国の支援と連携がなければ、北朝鮮体制の行方はますます不可測になるだろうと北京も分かっている。だから韓米日との意思疎通や連携（それが大事で不可欠と中国は理解するが）を後回しにしても、当面は金正恩とのパイプ作りを優先すべきと判断したと考えられる。

「中国は北朝鮮の最大の援助国であり、北が必要とする石油の90%、日常消費物資の80%、食糧の45%を供与しているから、ストレートにピョンヤンにその意思を伝え、聞かない場合は圧力を加えればいいじゃないか」との単純な質問を時々受ける。それは東洋の歴史と文化、および弱者の心理を理解しない発想である。中国は2000年以上にわたって朝鮮半島と交流する経験があり、さらにここ60年間の北朝鮮との付き合いの体験を足して、プライドの高い北朝鮮の友人に、これをやれ、聞け、と言えば逆効果だと、いやなほど経験と教訓を積んでいる。それより、信頼できる大国としての姿勢を明らかにしたうえで、相手が進んで相談に来れるようさりげなく道筋を作り、それを受けて「同志的」なアドバイスを与える、このスタイルが最も効果的で、長期的な信頼関係の構築にも役立つと中国側は理解している。そして今こそ、新指導者金正恩に、中国は信頼できるパートナーだと受け止められ、北京で「同志的」な対話と交流を行う一番良

いタイミングだと分かってもらう必要があると中国指導部は考えているのではないかと思われる。

中国の軍事介入はあり得ない

さらに、中国は隣国との関係を目の前の問題対処に止まらず、10年、20年後を見越した対応を常に考える。相手の首を絞めるような圧力を加えることで一時的に効果があるかもしれない。しかし長期的に見れば、その行動は相手の心に深い傷を残し、後々の交流、協力にまで後遺症が多いと理解されている。したがって北朝鮮の核実験に中国は断固反対の立場を示したが、国連安保理の共同行動に参加する形で一部の制裁に加わっても、単独の突出した経済制裁という方法を取らなかった。おそらく今後も同じ対応になるであろう。中国の多くの学者は、日朝関係についても、「厳しい経済制裁を加えれば懸案問題で相手から譲歩を引き出せるとの日本国内の一部の考え方は近視的で、短期的にも効果はないし、長期的には不振が残るだけ」と冷ややかに見ている。

では仮に北朝鮮情勢がコントロールを失うような局面になったら中国はどう動くか。2008年1月、米外交シンクタンク CSIS の報告書は「北朝鮮で混乱が発生した場合、中国は軍隊を派遣して介入する計画を持っている」との「中国情報」を披露した。朝日新聞記者も最近、「中国軍関係者」の言葉として、「わが軍の機動力は高まっている。いざとなれば2時間余りでピョンヤンに入ることができる」との軍事介入を示唆した言葉を引用している⁴。実は中国軍による単独出兵という可能性はほぼゼロに近い。そのような「出兵」「軍事介入」の予測は中国外交の基本的スタイルとその朝鮮半島戦略を理解していないからだと言わざるを得ない。経済的にも軍事的にも泥沼のような場所に単独で首を突っ込ませてはならないことは米軍によるベトナム戦争、イラク戦争、アフガン戦争の教訓であるし、中長期的に見て「百害あって一利なし」との根本的な判断が北京指導部にあると思われる。

中国の発想とその新しい政策を理解するのに、最近の中国のマスコミ報道にもっとアクセスする必要がある。中国のマスコミではネットの記事を含めば意外と北朝鮮関連の情報や記事が多い。日本などでは中国のマスコミは当局の厳しい統制、管理下に置かれているとのイメージがあるが、筆者はここ2、3年、中国のマスコミ報道はかなり自由で活発になったと感じており、特に国際問題に関しては CCTV を含めてほとんど規制がなくなり自由度が大幅に広まっていることを聞いている。特にインターネットの世界は変化が大きい（続いて、雑誌の記事は新聞より面白い）。国営と党所属の新聞やテレビ局はいずれも自分のウェブサイトをもっており、新聞やテレビで伝えにくい情報と分析は同じ会社が運営するウェブサイトには比較的自由に掲載できる。「Xデー」以後の北朝鮮の状況やその行方および中国の対策に関して、筆者は主に有名な経済紙『国際財經時報』のウェブサイト (<http://www.ibtimes.com.cn/>) の「国際」コラム、2004年

⁴ 2012年1月22日付『朝日新聞』朝刊、「中国軍解剖」特集。

に創設した金融・経済問題が中心の影響力あるウェブサイト「価値中国」網（<http://www.chinavalue.net/>）の「焦点観察」コラム、凱迪網絡（<http://www.kdnet.net/>）の「時事深度」コラム、天涯社区（<http://www.tianya.cn/bbs/>）の「国際観察」コラムなどを検索したが、中国の学者、記者による忌憚らない議論だけでなく、日韓米など各国の記事や論説も転載されていることが分かった（著作権使用料を払っているかは分からないが）。

以下は主に中国のネットに掲載された記事や解説に基づいて、中国から見た金正恩体制の行方や今後の中朝関係について検証したい。

中国流の改革開放路線を取り入れるか

中国の学者や研究者の多くは、「金正恩は当面、軍の支持を取り付け、国内体制の安定を図るのを一番重視せざるを得ないが、問題が山積する経済体制の立て直しも避けて通れない。それに取り組む場合、中国式の改革・開放路線の受け入れはほぼ唯一の選択肢」との見方を持っている。金正恩は「過去には食料がなくても銃弾は必ず持たなければならなかったが、今日は銃弾がなくても食料を必ず持たなければならない」と語ったとされる言葉はよく引用され、金正恩の指導力が確立されれば経済改革に真剣に取り組むだろうという期待が高いようだ。

北京大学国際戦略研究センターの朱鋒教授は、金正日の死去は北朝鮮の経済改革推進にとって弾みとなると見る。ここ数年、金正日はすでに中国モデルの経済改革に試行錯誤しながら着手しており、金正恩がしっかりと権力を掌握し、経済改革重視の道に入れば「5年から10年以内に北朝鮮は大きく変貌するだろう」との展望を示した。清華大学国際問題研究院の劉江永副院長は「日米間の指導者は、北朝鮮が経済重視へと舵を切れるよう、金正恩新体制に善意的なメッセージを発すべきだ」と提言した⁵。

ただ、現実的に金正恩はすぐかじを切れるかについて、慎重な見方も多い。中国社会科学院の北朝鮮問題専門家朴健一教授は、「権力の移譲がスムーズに行くことは大きな問題にならない。金正恩にとって真の挑戦はやはり経済問題だ」とし、当面は金正日の路線を大きく変えることは考えられないが、金正日の晩年も経済改革に取り組んでいたため、この方向は持続されるだろうと分析した。なお、「2012年は北朝鮮にとっては権力移行の転換期で、周辺諸国も選挙や首脳交代の年を迎えているので、北朝鮮をめぐる内政と外交の両面とも今年は大きな変化はないだろう。しかし2013年は北朝鮮の内政と外交にとって本格的な試練が訪れる年になるだろう」と予測した⁶。

吉林大学東北アジア研究所の徐文吉教授は、「北朝鮮はすでに経済の10年復興計画を制定しており、国内の経済運営は徐々に正常化に向かっている」との情勢認識を示したうえで、経済改革に取り組んでいかざるを得ないが、「中国モデル」の導入には簡単に

⁵ 同脚注3。

⁶ 雷志華「朝鮮開啓金正恩時代」、広州『南風窓』誌2012年1月13日号。

踏み切れず、あくまでも「チュチェ思想」の堅持、すなわち自国の力、資源に頼って経済の強盛を目指すとの理念を当面は継承していくのでは」と指摘した⁷。

金正恩新指導部は対外的な軍事挑発をするだろうか。それに関して遼寧省社会科学院の呂超・朝鮮－韓国研究センター主任は、常識的に考えれば、それはないだろうと述べた。確かに、「瀬戸際外交」は、高度に集中した権力によって各分野の力（軍事、外交、経済など）を結集して初めて踏み切れるもので、一步間違えば自分がやけどする危険もあるので、まだ権力の掌握過程にある金正恩はそれはできない。ただ、逆に弱者の心理に由来して、外部の挑発には予想以上の反発ないし報復を行うことは考えられる。呂教授は、近い将来の懸念事項は北朝鮮の対外的挑発ではなく、権力移譲の過程で混乱が生じることだとし、それが発生した場合、「北東アジアのみならず、より広い国際関係も大きな衝撃を受けるだろう」と展望した⁸。

中国の北朝鮮政策の展望

中国の北朝鮮政策は「Xデー」後、どのような新しい展開があるのだろうか。

中国のネット上、「あんなに中国の話を書かず、迷惑ばかりかける政権を中国はなぜ支援しなければならないか」といった北朝鮮批判の書き込みは多い⁹。中国軍の高官も公の場で、中朝関係に三つの深刻な問題があると率直に述べたことがある。それはすなわち、①北朝鮮が所有する大量破壊兵器は中国にとっても大きな脅威を成すこと、②北朝鮮の対外強硬路線が万が一戦争を誘発した場合、大量の難民が中国に流入すること、③毛沢東時代は北朝鮮に複数の山や島を贈与したが、所有権が不明朗な部分が残っており、将来的に外交紛争の種になりかねないこと、である¹⁰。

それにもかかわらず、「Xデー」後、中国指導部は早速、ピョンヤンに50万トンの食糧と25万トンの原油という大規模な経済支援を行う方針を決めたと報じられた¹¹。その事実の確認は取れていないが、中国指導者が「Xデー」後に行った一連の態度表明と一致するもので、憶測ではないと思われる。

では中国はなぜ、金正恩新体制への全面的な支持と支援を決定したのか。これまで多くの分析が出ているのでそれを繰り返さないが、最近の中国のネットに掲載された「損得勘定説」は大変興味深いので、紹介しておきたい。

それによると、米国が中国を最大のライバルとして警戒しており、その軍事力の「アジア復帰」が加速する状況の下で、もし北朝鮮に不測の事態が発生し、米軍が介入する

⁷ 同上。

⁸ 同脚注3。

⁹ 筆者は中国国内のネット世論について検証した小論を書いている。『中国が変える世界秩序』（朱建榮他共著、日本経済評論社、2011年）第5章を参照せよ。

¹⁰ 張召忠「金正日は最終的に中国を裏切って米国に付くか」、ウェブサイト「価値中国网」2011年7月24日の「転載」（出所不明）。http://www.chinavalue.net/Story/272732_4.aspx

¹¹ 東京新聞朝刊、2012年1月30日。

ような事態になれば、およそ 20 万人の米軍が鴨緑江の南岸まで進出して配備されるようになる。その場合、中国軍は全兵力の 5 分の 1 に当たる 40 万人の兵力を常時、中朝国境付近および遼東半島に張り付けなければならず、全国防費の 15%以上がこれによって費やされる。それに比べれば、北朝鮮政権の安定を維持することによって、限定的な米軍が 1 千キロ以遠（韓国と日本）の配備に止まり、中国は年間 500～600 億人民元の経費を省くことにもなる。だから、中朝関係に一定の問題が存在するとしても金正恩体制を支えたほうが「コストははるかに低い」計算になる¹²。

金正恩体制を全面的にバックアップする中で、北朝鮮の核開発問題について中国はどう考えているだろうか。今年 1 月 18 日にソウルで開かれた「ポスト金正日時代：北朝鮮情勢と国際協力」を題する国際シンポジウム（韓国統一研究院と朝鮮日報の共催）で、この問題に関する韓国側学者の質問に対して、中国人民大学の成曉河教授は「中国の解放軍側は、北朝鮮政権は果たして非核化を考えているかを懐疑的に見ている。言えることは、北朝鮮が核兵器を所有することは中国の国益に反するもので、今後も容認する余地はない」と答えたと中国のネットでも報じられた。

中国側研究者の見解を総合すると、中国指導部が金正恩体制の安定化を全面的に支持・支援していく方針は決まったが、6 者協議の問題や半島の非核化、韓米日との協調など多くの問題に関する方針はまだ流動的な一面があることが分かる。それに影響を及ぼすファクターは、米軍の「アジア復帰」と米中間の信頼醸成の度合い、日韓との関係改善の度合い、および中国自身の国内情勢の推移などと挙げられるが、その成り行きを見守っていきたい。

掲載：聖学院シンポジウムに提出論文 2012 年 2 月

¹² 「金正日の死去：安定した朝鮮は中国にとって極めて重要」、ウェブサイト「中国戦略網」2011 年 12 月 21 日転載（出所不明）。

http://mil.chinaiiss.com/html/201112/21/a45e01_1.html